

[国 語]

小学校1年生における望ましい筆記具の持ち方に関する指導方法の工夫

大西 愛*

1 問題の所在

小学校1年生の担任が、平仮名を指導する前に行うのが、硬筆筆記具の持ち方（以下、本研究で筆記具と明記した場合は、硬筆筆記具とし、鉛筆に限定する。）の指導である。これまでの先行研究では、教科書に記載されているような望ましい持ち方は、字形を整えて書きやすい、手の疲労を軽減する等のメリットが検証されている。特に、小林¹⁾によれば、未就学児に筆記具の持ち方の指導をした場合、望ましい筆記具の持ち方の育成だけでなく、望ましい点画の形やその書き方に関しても、効果をもたらしているとする。（但し、小学生に関する筆記具の持ち方と字形の変化については言及されていない。）

入学間もない児童の筆記具の持ち方は様々であり、望ましい持ち方（本研究で述べる望ましい持ち方の概念については、押木²⁾らの概念に基づく。）をしていないことが多い。その一方で、入学間もない1年生は、文字を書くという行為に興味がある。早く書きたい、早く習いたいという思いが大きい。就学前に、すでに文字の練習をしてきている児童は、特にその傾向にある。

以上より、入学して間もない児童に望ましい筆記具の持ち方を指導することは、書くことを伴う多くの学習活動に重要かつ効果的である。しかし、望ましい筆記具の持ち方は一度学習したからといって簡単に身に付くものではない。よってその指導方法については、児童の精神的、肉体的負担を少なくし、より効果的かつ継続的な工夫が必要である。

2 研究の目的

望ましい筆記具の持ち方の指導方法として、小林¹⁾は筆記具に親指と人差し指の位置を示すシールを貼る方法を試みている。また、光村図書「小学校書写学習指導書一年³⁾」には、輪ゴムを使用した筆記具の持ち方の練習方法が記載されている。この2つの指導を行う際、より効果的な活用方法、並びに1年生にとって、書く意欲が持続できる手立てを提案する。

本研究では、より効果的に指導するために、最も使用頻度が高く児童にとって愛着のある氏名を題材に用いる。位置を示すマーク及び輪ゴムによる指導方法と氏名を用いた題材の組み合わせが、小学校1年生に望ましい筆記具の持ち方を効果的かつ継続的に指導する方法として有効であること明らかにする。

3 研究の内容と方法

2012年、1年生9名について、4月から7月までの約4か月間、筆記具の持ち方調査、望ましい筆記具の持ち方の指導、アンケート調査を行った。アンケート調査については、筆記具の持ち方の指導を実施していない2年～6年生56名についても実施した。筆記具の持ち方の画像や書かれた文字、アンケート調査の結果を分析考察し、研究の成果と課題をまとめる。

(1) 筆記具の持ち方調査について

1年生9名（すべて右利き）について、筆記具の持ち方調査を実施した。調査日は、約1か月おきに4回（4月17日、5月17日、6月18日、7月17日）実施し、その変化をおた。調査の際、児童には氏名の練習の時間であることを伝えいつも通り書くように指示した。

調査には、市販されている2Bの三角鉛筆を使用し、児童が氏名を書いている様子をデジタルカメラで撮影した。撮





* 上越市立美守小学校

影した静止画から、被験者の筆記具の持ち方を判断し分類した。筆記具の持ち方の分類については、次項で述べる。

(2) 筆記具の持ち方の分類

本研究における筆記具の持ち方の分類は、押木²⁾や小林¹⁾を参考にし、表1の4つとする。

表1 筆記具の持ち方における分類

Aタイプ	Bタイプ	Cタイプ	Dタイプ
			
筆記具と人差し指の間に空間ができず、筆記具と親指の間に空間が1つできる。筆記具は、人差し指の左側面・第2関節から第3関節の間で接触。	筆記具を挟んで人差し指と親指の間に空間が2つできる。筆記具は、人差し指の付け根で接触。	筆記具と人差し指の間に空間が1つできる。筆記具は、親指と人差し指との股の部分と親指の第2関節と第3関節の間で接触する。	筆記具と人差し指の間、筆記具と親指の間の何れにも空間ができない。筆記具は、親指の第2関節と第3関節の間で接触する。

なお、本研究で調査した1年生が使用する教科書に記載されている筆記具の持ち方は、Aタイプである。

(3) 筆記具の持ち方の指導について

2つの方法で、筆記具の持ち方の指導を行った。視覚的に筆記具先端部と指の位置を確認できる方法（筆記具先端部に関する三色マーク法：図1）と筆記具上部と指とを固定させる方法（筆記具上部に関する輪ゴム法：図2）である。どちらの指導も、国語または書写の時間に実施した。指導過程及び調査日は、表2の通りである。氏名を練習する時間は、1回約5分間である。なお、筆記具の持ち方調査も練習の1つと見なし、練習及び指導日数に含ませる。指導の際、筆記具の持ち方が向上したり、児童が自ら筆記具の持ち方に気を付けようとしたりした場合は、励まし等の言葉掛けを行い、児童の意欲が持続する工夫をした。

表2 指導過程及び調査日

	4月	5月	6月	7月
指導内容	4/18 三色マーク指導(16回)	5/31	6/1 輪ゴム指導(12回)	7/23
調査日	4/17 現状把握	5/17 効果確認	6/16 効果確認	7/17 効果確認

本研究では、筆記具の持ち方を無理やり変えるのではなく、児童が自分で考えながら筆記具の持ち方を修正できるように、筆記具先端部に関する三色マーク法で視覚的に提示した後、物理的に補助する筆記具上部に関する輪ゴム法を実施した。

2つの指導方法の詳細は、以下の通りである。

① 筆記具先端部に関する三色マーク法（図1）

児童が、親指、人差し指、中指の位置を理解できるように、三角鉛筆に予め3色のマークを付けた。（図1には、マークが2点しか見えないが、裏面に3点目のマークがある。）最初に、どの指を何色のマークの上に置けばよいのかを指導し、全員できていることを確認した。4月5月の2か月間、氏名の練習をする際はこの方法を用いた。なお、三色マークを使用した方法は、小林による方法を参考にした。

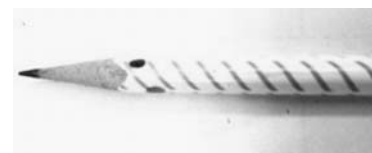


図1 筆記具先端部に関する三色マーク法

② 筆記具上部に関する輪ゴム法（図2）

三角鉛筆と人差し指を輪ゴムで固定し、望ましい筆記具の持ち方になるように指導した。6月7月の2か月間、氏名の練習をする際は、この方法を用いた。

この方法は、光村図書の「小学校書写学習指導書一年」³⁾に紹介されている方法である。



図2 筆記具上部に関する輪ゴム法

(4) アンケート調査について

次の2種類のアンケート調査を6月と7月に実施した。

① 望ましい筆記具の持ち方の理解に関するアンケート（6月実施）

1年生～6年生の計65名が、望ましい筆記具の持ち方を理解しているかを把握するためのアンケートである。表1の

4つの持ち方の中で、望ましい筆記具の持ち方だと思うものに○をつけるという簡易的なアンケートである。

② 望ましい筆記具の持ち方の学習意欲に関するアンケート（7月実施）

1年生9名が望ましい筆記具の持ち方の指導後にどのような自己評価をしているのかを調査し、児童の意欲を把握するためのアンケートである。4月と7月に書いた自分の氏名を見比べた時の自己評価（回答方法は自由記述）、字を書くことが好きかどうか（回答方法は選択式）、筆記具の持ち方の学習が好きかどうか（回答方法は選択式）、字を書くときに気を付けていることは何か（回答方法は自由記述）という内容である。

4 分析考察

(1) 学級内の筆記具の持ち方の変化

グラフ1は、1年生9名における学級内の筆記具の持ち方の変化を示している。4月は、4種類の筆記具の持ち方の人数がほぼ同じである。この調査を実施したのは、筆記具の持ち方指導を始める前であり、筆記具の持ち方は多様である。しかし、7月には7人の児童が望ましい筆記具の持ち方となっており、指導に費やした時間に対し短期間で向上したと言える。これは、日常的に書く回数が多い氏名を用いて指導、練習を実施した効果と推測する。

グラフ1を見ると5月は、望ましい筆記具の持ち方であるAタイプの人数が4月に比べると2倍になった。一方で、Cタイプ、Dタイプの人数はあまり変化していない。5月の調査で、Aタイプの人数が4月よりも2倍になった理由として、4月、5月に実施した筆記具先端部に関する三色マーク法の指導により、児童が指と筆記具との位置関係を視覚的に意識できるようになったからではないかと考える。実際に氏名の練習をする際、「赤色は親指だよ、青色は中指だよ」とつぶやき、位置を確認しながら練習する姿が見られた。Cタイプ、Dタイプの人数が4月、5月であまり変化していないのは、指と筆記具の位置関係を理解できたとしても、指の調整における巧緻性が十分でない場合、Aタイプの持ち方を再現できないからではないかと考える。

6月は、Aタイプの人数が4月に比べると2.5倍になった。7月はさらに増え、3.5倍になった。6月、7月は、筆記具上部に関する輪ゴム法で指導と練習を実施した。指の調整における巧緻性が十分でなく、Aタイプの持ち方を再現できない児童にとっては、指と筆記具とを固定して練習したことでAタイプの持ち方に慣れることができたのではないかと推測する。このことが、Aタイプの持ち方が増えた理由であると考えられる。

月を重ねるにつれ、望ましい筆記具の持ち方であるAタイプの人数が増えた。しかし、残りの2名はCタイプDタイプの筆記具の持ち方をしたままである。この理由については、(3)筆記具の持ち方における個人内の変化②の分析考察で述べる。

(2) 筆記具の持ち方における個人内の変化①

筆記具の持ち方における9名の児童の4か月間での個人内変化は、表3の通りである。

指導により1度でもAの筆記具の持ち方をした児童を改善傾向とする。但し、4か月間継続してAの持ち方だった児童については、改善傾向は判断できないため、斜線とする。4か月間においてAの持ち方をした児童がその後、継続してAの持ち方をした場合は、安定とし、その他は不安定とする。但し、7月のみAの持ち方をした児童の安定性については、判断できないため斜線にする。

表3より、4月に望ましい筆記具の持ち方でなかった児童については、今回の指導により全員改善傾向となった。しかし、その中で安定した筆記部の持ち方の児童は2名であり、その他は不安定な筆記部の持ち方であった。入学間もない児童は、書くことへの不慣れ、手の巧緻性の問題、改善への意欲不足などにより、望ましい持ち方であるAの持ち方を持続できないと推測する。また、幼さが残る1年生の特性から、体力的に疲れている時や集中力に欠く時なども、不

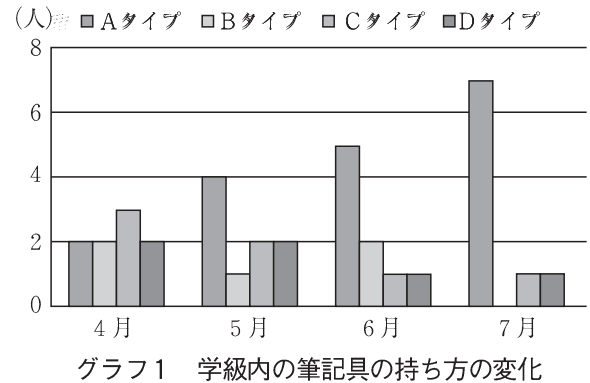


表3 筆記具の持ち方における個人内変化

	4月	5月	6月	7月	改善傾向	安定性
児童①	B	D	A	D	改善	不安定
児童②	C	A	C	A	改善	不安定
児童③	A	A	A	A	/	安定
児童④	D	C	D	A	改善	/
児童⑤	A	B	B	A	改善	不安定
児童⑥	C	C	A	C	改善	不安定
児童⑦	C	A	B	A	改善	不安定
児童⑧	B	A	A	A	改善	安定
児童⑨	D	D	A	A	改善	安定

安定になる要素の一つである。1日の中での指導のタイミングを工夫し、その指導を継続する必要があると考える。

(3) 筆記具の持ち方における個人内の変化②

表3の児童①, 児童⑥に着目する。この2名の児童は、7月の調査では、CタイプDタイプの筆記具の持ち方をしていた。この両者に共通しているのが、筆記具上部に関する輪ゴム法の指導と練習を取り入れた直後の6月は、望ましい筆記具の持ち方をしていたが、その後、7月になると5月の持ち方に戻ってしまったという点である。指導法の変更により、それがプラスの効果をもたらすものではなかったことが考えられる。そこで、本研究では実施していないが、同時に筆記具先端部に関する三色マーク法と筆記具上部に関する輪ゴム法を実施する指導法を試みる必要もあると言える。

また、この2名の児童については、同じ練習方法に飽きてしまった、あるいは、望ましい筆記具の持ち方を学習するという意欲が衰退していったと考えられる。7月に行った筆記具の持ち方の学習が好きかどうか（回答方法は選択式）というアンケートに、児童①は好き、児童⑥は好きでないと回答している。望ましい持ち方をスキル面から指導するだけでなく、児童の意欲面を支える指導の工夫が必要であると言えよう。

(4) 字形の個人内変化①

押木²⁾らは、筆記具が親指の第一関節より付け根側で接触する場合に、1つの関節の調整機能を失うことになり、巧緻性において劣り、書字運動に問題が生じる可能性があるとして推測している。本研究では、表1のDタイプの筆記具の持ち方がそれに当たる。そこで、4月はDタイプの筆記具の持ち方だったが、7月にAタイプの筆記具の持ち方に変化した児童の字形に着目する。9名中、2名（表3の児童④, 児童⑨）がそれに当たる。

表4の児童④の「ふ」に着目する。○で囲んだ2画目の終筆部について、4月は「止め」だが7月は「払い」に変化していた。「払い」は、終筆に向うにつれ筆記具の先端を少しずつ上げて、紙面から離す必要がある。一方、「止め」は紙面からすぐに筆記具を上げればよい。「払い」の方が「止め」よりも難易度が高いと考えられる。○で囲んだ3画目の「はね」について、4月は2段階ではねられていたが、7月は1回でスムーズに右上にはねられていた。児童④の場合、筆記具の持ち方がDタイプからAタイプに変化したことで、細かい書字運動が可能になり、「払い」「はね」の望ましい平仮名の基本点画の用筆が表出しやすくなったと推測する。

表5の児童⑨の「ざ」に着目する。○で囲んだ2画目と3画目の空筆部（点画と点画の間も何らかの書字運動がなされていると考え、本研究では、書字運動が軌跡として紙面に表れない部分とする。）の運動の距離が、4月よりも7月の方が長くなった。これは、筆記具の持ち方が変わったことで、2画目の「はね」から3画目の点画に移動する際、より書字運動がしやすくなり、運動の距離が伸びたと推測する。

(5) 字形の個人内変化②

4月にCタイプだった児童が7月にAタイプに変化した場合について分析する。この変化に該当する児童は、表3の通り2名（表3の児童②, 児童⑦）確認できる。

表6の児童②の「が」に着目する。○で囲んだ1画目の「曲がり」の部分について、4月はほぼ直角に「折れ」ていたが、7月はカーブを描いた「曲がり」になった。表7の児童⑦の「ま」に着目する。3画目の「結び」について、中の空洞が縦長の楕円から横長の楕円に変化した。また、終筆部において、4月は右上に円弧を描くように上がり、右下に下がっていた。7月は右下に直線で下がっていた。このような児童②, 児童⑦の字形の変化の理由の1つとして、筆記具の持ち方が変わったことで、より運動しやすくなりその結果、整った「曲がり」や「結び」が表出できるように

表4 児童④「ふ」の字形変化

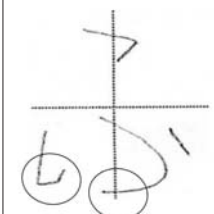
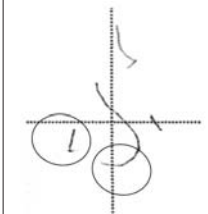
4月	7月
	

表5 児童⑨「ざ」の字形変化

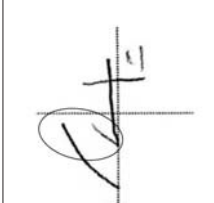
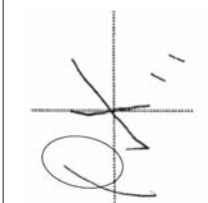
4月	7月
	

表6 児童②「が」の字形変化

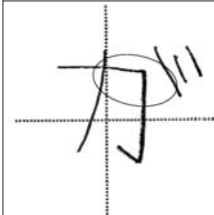
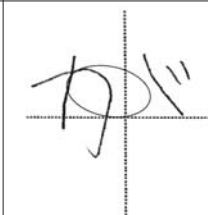
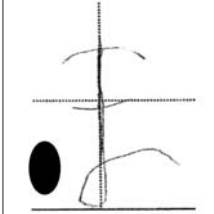
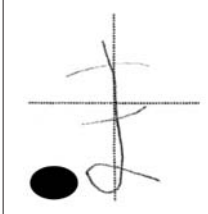
4月	7月
	

表7 児童⑦「ま」の字形変化

4月	7月
	

なったのではないかと考える。

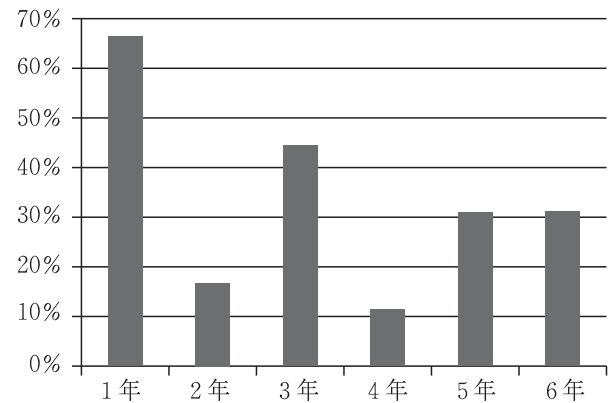
小林⁴⁾の調査によれば、未就学児においては、筆記具の持ち方に関係なく「曲がり」「結び」は難易度の高い点画であることが明らかになっている。小林は、その指導については、特別な配慮を要すると述べている。入学まもない1年生に平仮名指導を行う際、筆順や字形のみを指導するのではなく、同時に望ましい筆記具の持ち方を指導することで、難易度の高い点画の表出が可能になると推測する。

(6) 望ましい筆記具の持ち方の理解

1年生～6年生の計65名における望ましい筆記具の持ち方の理解に関するアンケート結果は、グラフ2の通りである。表1の4つの持ち方の中で、望ましい筆記具の持ち方だと思うものに○をつけるという簡易アンケートであったが、学年間で大きな差が見られた。

筆記具の持ち方について、一定期間継続して練習している1年生は、どのような持ち方が望ましいのか理解している割合が67%（6名）と一番多い。2年生以上においては、望ましい筆記具の持ち方に関して知識が不足しているといえる。

2～6年生の担任は入学時と変わっているため、1年生の時にどの程度、筆記具の持ち方の指導、練習をしたかという調査はしていない。しかし、1年生の担任ならば望ましい筆記具の持ち方の指導をするはずである。既習事項である望ましい持ち方の理解が、学年が上がると低くなる傾向にあると推測する。学年が上がっても、継続して望ましい筆記具の持ち方指導が必要であると言えよう。



グラフ2 望ましい筆記具の持ち方の理解に関する割合

既習事項である望ましい持ち方の理解が、学年が上がると低くなる傾向にあると推測する。学年が上がっても、継続して望ましい筆記具の持ち方指導が必要であると言えよう。

(7) 望ましい筆記具の持ち方の児童の意識

7月に1年生9名に行った「あなたが字を書くときに気を付けていることはどんなことですか」という自由記述式アンケートでは、児童から表8のような内容が見られた。

筆記具の持ち方に関する記述をした児童は、9名中7名であった。1年生の児童の中に、字を書く時は筆記具の持ち方に気を付けようという意識付がされ、概ね、学級全体に定着したと考える。単発での指導ではなく、4か月間継続して指導した結果であると言えよう。

しかし、9名中2名の児童は、「ありません」「下敷き」という回答であり、筆記具の持ち方に関する記述は見られなかった。「ありません」と回答した児童は、先で述べた児童⑥であり、筆記具の持ち方の学習が好きではないと回答した児童でもある。この児童の筆記具の持ち方の変化は、表3の通りである。児童⑥にとっては、4か月間の持ち方指導が適切ではなかったと推測する。一斉指導で定着しなかった児童については、個に応じた指導の工夫が必要であろう。

表8 アンケート調査 自由記述欄

- ・鉛筆の持ち方。上手に丁寧に書く。下敷きを入れる。日にちを忘れない。字を書くとき、字を間違えない。(1名)
- ・間違えないようにする。いい持ち方をする。(1名)
- ・持ち方や下敷きを入れます。(1名)
- ・持ち方に気を付けています。書き順に気を付けています。(1名)
- ・下敷き。(1名)
- ・ありません。(1名)
- ・持ち方。(2名)
- ・持ち方に気を付けて、ちゃんとやる。(1名)

5 研究の成果と今後の課題

(1) 研究の成果

① 氏名を用いた書き方指導の有効性

日常的に書く回数が多い氏名を用いて筆記具の持ち方の指導、練習を実施した結果、望ましい筆記具の持ち方に变化した児童が月を重ねるごとに増えた。氏名を用いることは、児童にとって練習の負担感が少なく、抵抗なく取り組める課題であり、効率的な指導方法であると考えられる。また、1回の練習時間が約5分であり、児童だけでなく担任にとっても気軽に授業で用いることのできる題材であると言えよう。

② 身近な道具による指導の有効性

1年生に筆記具先端部に関する三色マーク法と筆記具上部に関する輪ゴム法を用いて指導、練習を実施した結果、9名中6名が、望ましい筆記具の持ち方に变化した。(7月の調査では、9名中7名が望ましい筆記具の持ち方であった。

しかし、7名中1名は、1回目の調査から一貫して望ましい筆記具の持ち方だったため、変化したのは6名である。) 三色マークは視覚的な補助教材になり、輪ゴムは物理的な補助用具になる。児童が望ましい筆記具の持ち方を意識するための道具としてとても効果的であり、身近な道具で誰にでもできる指導方法の1つであると言える。

③ 継続した指導の有効性

筆記具先端部に関する三色マーク法や筆記具上部に関する輪ゴム法を1回行っただけでは、望ましい筆記具の持ち方の理解と定着にはつながらない。4か月間の継続した指導が1年生にとっては必要であり、さらに、継続した指導は、学年が上がっても実施される必要があると確認できた。

④ 字形変化への影響

1年生に筆記具の持ち方の指導をすることで、字形に変化が見られる児童が確認できた。また、筆記具の持ち方が変化したことにより、難易度の高い点画の表出が可能になったり、空筆部の書字運動の距離が伸びたりできるようになった児童も確認できた。字形変化の1つの要因に、筆記具の持ち方の変化が関係していると推測できる。

⑤ 2年生以上における筆記具の持ち方の理解

2～6年生へのアンケート調査により、2年生以上の筆記具の持ち方の知識不足が明らかになった。小学校6年間を通した定期的な筆記具の持ち方の指導が必要である。また、指導する際は、具体的に児童に指導することで、筆記具の持ち方の知識不足を補うことができるのではないかと考える。

(2) 今後の課題

① 個別指導の工夫

本研究では、筆記具先端部に関する三色マーク法で指導した後、筆記具上部に関する輪ゴム法を実施した。しかし、指の調整における巧緻性が十分でない児童については、同時に筆記具先端部に関する三色マーク法と筆記具上部に関する輪ゴム法を実施するなどの個別指導が必要であると考えられる。視覚面と機能面を同時に支援することで筆記具の持ち方の理解が進むのではないかと推測する。

② 意欲面向上のための工夫

本研究では、自分の書いた字の自己評価を1度しか実施しなかった。定期的に自分が書いた文字や筆記具の持ち方の自己評価を行うことで、児童は自分の字形の変化や筆記具の持ち方の変化に気が付くことができ、意欲面が向上すると考える。意欲面の向上が、筆記部の持ち方の向上につながると推測する。

③ 様々な場面における筆記具の持ち方の調査及び指導

本研究では、氏名を書く場面での筆記具の持ち方のみを調査した。しかし、いかなる場面においても望ましい持ち方ができるようになるのが理想である。今後、その他の場面における筆記具の持ち方の調査をする必要がある。さらに、氏名以外の文字を書く時の筆記具の持ち方の指導方法も工夫していきたい。

④ 調査対象の拡大

本研究の対象は1年生9名であり、少人数であった。研究のデータ数としては少ない。また、2～6年生を対象にしたアンケート調査では、その学年が1年生だった時まで遡って聞き取り調査をしていない。今後、対象人数を増やし追調査を行うことで、さらに筆記具の持ち方指導の在り方を探ることができると考える。

引用・参考文献

- 1) 小林比出代 「未就学児の硬筆筆記具の持ち方と書かれた点画の発達段階における変化」『書写指導教育研究25号』2011.3, 31～40pp
- 2) 押木秀樹他 「望ましい筆記具の持ち方とその合理性および検証方法について」『書写指導教育研究17号』2003.3, 11～20pp
- 3) 常田寛 『小学校書写 学習指導書一年』2011.2, p20
- 4) 小林比出代 「未就学児の硬筆筆記具の持ち方に関する一考察—書写教育の視点から—」『書写指導教育研究24号』2010.3, 100～105pp